
誘拐

麻未夢

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘拐

【Nコード】

N94480

【作者名】

麻未夢

【あらすじ】

久々に再会した友人は、どこからか連れてきてしまったという女の子と一緒にだった。誘拐してきたわけじゃないという友人の言葉を信じる『私』だったが、普段とは違う友人の様子に疑問を感じる。
この女の子は一体。

それは偶然の再会。

「久しぶり」

私は、前から歩いて来た仲睦まじげな様子で手を握り寄り添い歩く親子連れにふと視線を止め、それがしばらく振りに会う友人だと気づくと同時に、そう声を掛けていた。

少し俯き加減に歩いていた彼女だったが、声だけで私だと解ったのだろう、すぐに顔を上げて、学生時代とちつとも変わってない笑顔と一緒に「久しぶり」と弾んだ声を返してくる。

彼女は、7、8歳ぐらいの可愛いらしい女の子を連れていた。

「こんにちは」

そう声を掛けると、小さな声で「こんにちは」と返してきて、さつと彼女の後ろに隠れてしまう。

「可愛いわね。お子さん？」

彼女は首を横に振った。そして、女の子の手を握る手に力を込めるのが解った。

「ねえ、久しぶりだし、そこのお店でコーヒーでもどう？」

なぜか、このまま帰してはいけない、別れてはいけない、そんな気がした私はそう提案し、殆ど強引に引っ張るようにして彼女と子供を傍にあつたカフェに連れ込んだ。そして、私たちの前にそれぞれコーヒーが、女の子の前にフルーツパフェが運ばれてきた後で、単刀直入にこう尋ねる。

「……どこの子？」

フルーツパフェに夢中なその女の子は、私たちの会話なんて気にも留めていないようだった。

「解らないの」

「え？」

「こうやって余所の子を連れ歩いてるのは事実だし、言い訳をする

わけじゃないけど、この子が私を見るなり自分から駆け寄ってきたのよ。それから私の手を握って、笑いかけてきたわ」

そこで、女の子がようやく顔を私の方に向け、にっこり微笑んだ。どうやら、彼女が嘘を吐いてるんじゃないと言いたいらしい。

「……その子と会った場所に戻った方が良いんじゃない？」

私だって、彼女がこの子を誘拐しただなんて思わないし、思いたくもない。けれども、この結果だけ見れば、そう思われても仕方ないのだ。

「ね、一緒に行つてあげるから、とりあえず戻りましょうよ」

「駄目なの」

「え？」

「この子、泣くの。帰りたくないって、私とずっと一緒にいたいって」

私は女の子を見た。すると、やはり先ほどと同じように可愛らしい笑みを返してくるだけだ。

「だけど……」

「私もこの子を帰したくない。ずっと一緒にいたい。もう、どうなつたって良いの、この子と一緒にいられるなら」

その言葉に反応したように女の子は彼女の方に顔を向け、嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

何か変だった。私が知る限り、彼女は特に子供好きという事はなかった筈だ。それが何故、会ったばかりの子にこれほどの愛情を向けるのだろうか。

「じゃあ、どうするの？」

私の問いに、彼女は、解らないといった風に首を振る。そして、
「もう行くわ。あなたに迷惑をかけるわけにはいかないし」

「」

「バイバイ、おねえさん」

彼女について席を立った女の子は、不意に手を伸ばして私の手を掴み、そう言いながら私に笑いかけてきた。

その可愛らしい笑みを見た瞬間、私は私の中に、ある強い衝動が生まれるのを感じた。

この子と、一緒にいたい。

抗いがたい衝動を、それでも振り切る事が出来たのは、同時に何故か背筋に冷たい物が走るのを感じたせいだ。気が付けば私は、女の子の手を乱暴に振り払っていた。

そして、明らかに失敗している愛想笑いを女の子に返しながら、その内心を女の子に対する不信感でいっぱいにする。

何なの、この子……。

そんな私の内心を悟りでもしたかのように、女の子は可愛らしい笑みから一転、子供らしからぬ酷く冷たい瞳で、私の顔を睨みつけてきた。

なのに彼女は、私たちの間に流れる不穏な空気にはまるで気づかないらしく、女の子の手を握りしめると、

「またね」

と簡単な別れの言葉を残し、あっさり私に背を向けて行ってしまった。

そんな彼女の背中に向かって私は、ただ一言、こう告げるだけで精一杯だった。

「さよなら」

その後、数日経っても数週間経っても、子供が行方不明になったなんてニュースが世間を騒がせることはなかった。

ただ、彼女の消息だけが、あの日を境にぶつとりと途切れてしまったただけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9448o/>

誘拐

2010年11月30日19時35分発行